



からしだね

2018年1月号

(534号)

キリストの受難 カトリック池田教会

共同宣教司牧：畠 基幸 神父・中村克徳 神父

協力司祭：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/>



本号の記事の主題など

中村克徳神父による巻頭言

「主のご降誕とルカ福音書の記述について」

夙川教会の梅原 彰 神父による待降節黙想会

梅原 彰神父に講話をお願いして

待降節「黙想会」

お元気な姿に勇気づけられて

「みんなの談話室」

『ガリラヤからローマへ

地中海世界をかえたキリスト教徒』をよむ

池田市歳末助け合い募金に協力

1月の教会カレンダーへの追加と変更

巻頭言

主のご降誕とルカ福音書の記述について

中村克徳 C.P.

皆さん、主の御降誕おめでとうございます。師走の忙しい時期とあって待降節を慌ただしく過ごすことも多いなか、気がつけばご降誕祭を迎えていたという人もおられることでしょう。寒さが苦手なわたしは、真冬を感じさせる寒波の到来に憂鬱な思いを抱くことしばしばです。

さて主の御降誕も、凍てつくような厳しい寒さの最中であつたと思われまゝ。ルカ福音書によれば、ヨセフとマリアは住民登録のために、ヨセフの出生地であるベトレヘムへ行かなければなりません。現在の戸籍と似たシステムですが、ローマ帝国では住民税を効率よく徴収するために、14年に一度のサイクルで住民登録を行っていたようです。歴史家でもある福音史家聖ルカはこの年代について、「キリニウスがシリア州の総督であつたときに行われた最初の住民登録である」（ルカ2章2節）と記しています。しかしながら多くの聖書学者たちは、このルカの記述は正確性に欠けるのではないかと考えてきました。

ローマ帝国の行政資料によれば、キリニウスがシリア州の総督を務めていたのは紀元6年からであり、イエスが生まれたとされる紀元前7～4年とは隔たりがあるからです。またマタイ福音書ではガリラヤの領主であつたヘロデ大王が、生まれて間もない幼子イエスを亡き者にしようと兵隊を送つたとありますが、そのヘロデ大王は紀元前4年に亡くなつています。そのため、イエスの出生に関するルカ福音

書の記述は間違っているに違いない、という意見が聖書学者たちの共通した見解でした。

ところが、ジェリー・バードマンという考古学者によって、これを覆すような新たな発見がなされたのです。遺跡から発掘された一枚の古い硬貨には、マイクログラフィックと呼ばれる微細な文字で、紀元前11年からヘロデ大王の死後までキリニウスがシリア州の総督であつたことが記されていまして、これは、ローマ帝国の行政資料にミスがあつたのでしょうか？ 二つのケースが考えられます。第一に、古代では同じ名前を持つ人は珍しいことではなかつたため、シリア州の総督を務めたキリニウスという人物は二人いたのである、という説。第二に、キリニウス総督がシリア州を治めた時期は、紀元前と紀元後の二回であつた、という説です。オックスフォード大学とケンブリッジ大学で考古学の教鞭を執つた、故ウィリアム・ラムジー博士は、住民登録の年代とルカ福音書の記述が一致することから、後者の説を主張しています。

新約聖書が書かれてから約二千年になりますが、改めてルカ福音書が史実を正確に記載していることが分かりました。教会の聖伝にあるとおり、ルカはパウロの弟子であり、ルカ福音書と使徒言行録を記述した人であり、医者であり、そして史実を正確に記す歴史家でもあつたのです。主の御降誕の恵みが皆さんの上にありますように。

1月のガラスケースのことば

子たちよ、言葉や口先だけでなく、行いをもって誠実に愛し合おう

梅原 彰 神父による待降節黙想会

梅原 彰神父に講話をお願いして

11月26日夙川教会の梅原彰神父様をお迎えして待降節黙想会がひらかれました。ご自分の教会のミサを終えられてかけつけてすぐにミサをはじめられました。お疲れではないかと心配するまもなくとても力強いお声でした。とくに福音の朗読、お説教は心にひびきました。今まで何度も聞いたマテオ25章のみことばなのに神父様のお説教を聞いて本当に何が一番大切なのかとあらためて問われる思いでした。裁きの時に財産がたよりになるとは思わないけれど何かすこしづれている自分を感じます。大切なことは愛だけだということあらためておもいました。

ミサ後の第二講話は、少しリラックスされているようなお話をユーモアをまじえてお話くださいました。とくに石油ストーブのお話がこころに残りました。クリスチャンの役割は、石油ストーブであると話されました。石油ストーブがちゃんと燃えるためには、芯と良質な石油と十分な酸素が必要でありそれが何を意味するかと言えば「洗礼」と「動機」と「ご聖体・ゆるしの秘跡」だそうです。この三つがそろってはじめて石油ストーブはちゃんと燃えてまわりを暖めることができるのです。

神父さまとの昼食会は、30名近くの方が参加してくださり夙川教会の殉教された神父様のこと、教会の実践的な運営の仕方、等々お話は尽きませんでした。

今日食べて、寝ることができて、出すことができたら感謝だよ…数々の病気をされ今も闘病中の神父様だからこそその言葉だと思います。「明日のことは思い煩うな」のみことばのままにただ神様とひとびとのために働かれている神父様のおはなしを近くでうかがえる幸せなひとときであり待降節を大切にすごしたいと思いました。

研修委員会

待降節「黙想会」

本号がお手元に届くのはクリスマスの頃ですが、御生誕にさきだち待降節の黙想会が11月26日に開かれました。聖堂は当日ほぼ満席で、早朝

夙川教会からお越しいただく梅原彰神父さまをお迎えするのにふさわしい雰囲気でした。いつものようにミサのなかで御言葉をめぐって第一講話を、ミサ後に第二講話を語られました。

御言葉として採りあげられたのはマタイ25章です。世の終わりにイエスがひとびとを裁かれる様子が語られます。地上の国における暮らしぶりに応じて「羊を右に、山羊を左に」わけるように、わたしたちは選別されます。「羊」は天地創造のときから神が用意された天国へと招かれ、いつぼう「永遠の罰」を受けた「山羊」には「悪魔とその手下のために用意」された地獄の炎に焼かれるという運命が待ち受けています。なんだか恐ろしい話のように聞こえますが、もちろん「そうではない」というのが神父さまのお話です。イエスが用いる選別基準は難しくないので。

弱い者（「小さい者」）への思いやり、親切心、相手を大事にしようとする姿勢、困った者の立場を想像するだけの柔軟な心とささやかな行動がありさえすれば、天国への道が開かれています。いまの日本の言葉で言えば社会的弱者を大切にする社会をつくるように心がけよう、ということになるでしょう。

神父さまはアウグスチヌスの言葉を最後に紹介されました。わたしたちに与えられた「ふたつの翼」です。天使と同じように、人間であるわたしたちも「神を愛する翼」と「ひとを愛する翼」を羽ばたかせることで天国をめざすことができる、というものです。

約70名が参加したミサ終了後の第二講話は「石油ストーブ」のたとえ話でした。信者減や司祭高齢化など、司牧や信仰そのものをめぐって厳しい時代が到来しているのは、ご存じのとおりです。わたしたち信者はどのようにあるべきか、神父さまはご自分の体験をとおして語られました。

「全世界にいつて福音を伝えよ」とは、信者にひとしく求められる大事な仕事ですが、日々の暮らしに埋没してこの命令を忘れてしまっているのが、わたしたちの偽らざる姿ではないでしょうか。キリスト教信者であるわれわれ「石油ストーブ」が完全燃焼し、まわりのひとびとにキリスト教のよさを知ってもらうには、なにが必要かという問題提起でした。

まずは人としての素質、つまり「芯」が問題でしょう。わたしたちは「洗礼」という新しい芯をいただきました。つい忘れがちなの幸せを思い起こし、新た

な思いで洗礼の恵みをひとびとに伝えたいものです。「故障した部品の取り替え」も大事ですね。キリスト者としてのわたしたちも、ときに不純な動機に基づいて行動することがあるでしょう。神を喜ばすという目的だったはずの行動が、世間の賞賛や社会的地位の獲得にすり替わってしまうことがあります。気をつけたいものです。「灯油」がきれいに燃えるために清潔な酸素がいます。わたしたちにとっての「酸素」は御聖体です。日々あらたな活力を聖体からいただき、信者として生きてゆくための糧にしましょう。

もちろんわたしたちは一生懸命生きているが、完全燃焼はできないでしょう。でもみずからの不完全さに気づいて、自分というストーブをもっときれいに燃焼させるよう努めましょう。そう意識することで反省が生まれます。キリスト者としての輝きをみなさんのストーブの炎が放ちますように。

広報委員会

お元気な姿に勇気づけられて

大山利

力強い、大きな地声のお説教は、マイク無しでも、聖堂の隅々にまで届きそう。梅原神父様は、やや痩身ながら気力満々のご様子でした。

神父様は、がんの闘病生活十数年。胃は全摘。脾臓の手術二回。大腸も数センチに。その他、糖尿病もお持ちの様子。その神父様が仰るのです。「忙しくて忙しくて……今日は葬式、あすは結婚式、ミサを立て、黙想会を指導、人と面会、電話もかかりっぱなし。死ぬのもわすれてしまいましたわ」。

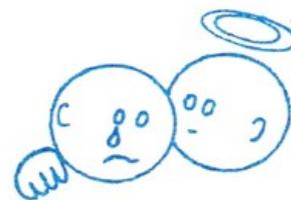
私も今春、大腸がんの手術を受けました。一般にがん手術を受けた後は体力激減。さらに抗がん剤という、毒薬ではないかと錯覚するほど、強い副作用の薬を飲み続けます。それで病院や医師は、患者の「生活の質」を向上させるために、いろいろと指導してくれます。術後の「生活の質」をQOL(QUALITY OF LIFE)などと、横文字で呼ぶほど重視。規則正しい運動や食事、俳句や和歌など、趣味に打ち込むなど、カリキュラムのような指導さえしてくれます。実行は中々困難な場合もありますが……。

そんな目で見ると、梅原神父様はQOLの超

模範。全く驚き！今度の黙想会の二週間くらい前には、イスラエルに巡礼されました。他にもフランスなどにも。「巡礼の最中は、色んな雑事を一切忘れて、全くホッとしますわ」。

梅原神父様が、こんな境地に達せられたのは、ご本人の誠実なお人柄に加えて、信仰の恵みも大きいのではないのでしょうか。我々の信仰は「死んだ後にも、神さまが何とかしてくださるやろ。天国に導いてくださるかも……」という、私のような罪人にも、何か安心させてくれる要素があります。だから一般の人たちとは、やや趣を異にします。闘病にも、余り落ち込まない。むしろ「死が近いから、残りの命を精一杯に生き抜いて、神様にまみえよう」などと思うことも。梅原神父様の黙想会に与って、お話の内容もさりながら、元気なお姿に、大きく勇気づけられました。

「お前さんの推定余命は六ヶ月やな。抗がん剤を使えば一年か二年」と病院治療チームから宣告されました。でも既に半年は経過。今後、落ち込んでも、梅原神父様の生き様を思い浮かべると勇気づけられて、案外長生きできるかもしれません。もちろん、神父様のように十年以上なんて無理でしょうが、まあ、四、五年は生き延びるかも。



…理解と共感を示す

みんなの談話室

『ガリラヤからローマへ 地中海世界をかえたキリスト教徒』(講談社学術文庫)をよむ

直

「どうしてイエスは殺されたの？」—ご近所の親しいおばさんに尋ねられて、どう答えましたか？「ム、ム—(汗)○×△□にパピペポ…」こんなじゃなかったですか。あれだけ人気があったのに、エルサレムではどうして「殺せ、殺せ」とまで憎まれたのでしょうか？

イエスの死でもわかりますが、福音書には未信者のひとにすれば戸惑うなぞがあれこれありますね。奇蹟や御復活などがすぐ思い浮かぶ。「畏れおおくも神さまの言葉だ」という思いで、第二朗読や御言葉に耳傾けるわたしたちではありますが、わたしたちの心にある「信仰の真実」と、未信者を含めた誰もが理解できる歴史的事実とは異なります。復活されたイエスを近所のおばさんにお見せしたくても無理。キリスト教に関心をもってきている人たちの疑問についてわたしたちは、どんな風に「真実」と「事実」との橋渡しをすればいいでしょう。

この課題に本書『ガリラヤからローマへ 地中海世界をかえたキリスト教徒』(講談社学術文庫)は把握しやすい「事実」に重点をおくことでアプローチします。みえない「真実」に入門者を導こうとはしますが、一般読者を対象として読みやすく書いてあります。たとえばイエスの磔刑は次のように説明されます—「ガリラヤを中心とした既存ユダヤ教の律法主義、形式主義、富者・エリート重視へのきびしい(イエスによる)批判と、神の国の到来の近いこと、愛に根ざす信仰の覚醒の呼びかけは、かなり民衆の共感をよび、ユダヤ教当局を危惧させ

るほどの広がりを見せたが、エルサレムの都市民衆を巻きこむほどにはいたらず、過越の祭に(イエスが)エルサレム入りするときには興味を示したものの、そこでのイエスの宣教活動には動かされず、ユダヤ当局のイエス排除策は比較的容易にすすめられた」(25)というのです。フムフム、なるほどと納得。

『聖書〇〇事典』のような(多人数執筆であるため避けがたい)無味乾燥な記述ではなく、広い視野と知識を必要とする事項が平易な言葉で的確に解説されます。キリスト教をめぐるわたしたちの「常識」も、歴史の事実というフィルターにかかると意外にもろいのがわかります。たとえばパウロという「異邦人伝道」というイメージが先だつてでしょう。アテネで失敗したのが有名なこともあって、まず「異邦人」を対象とした、と思いがち。しかし本書は明快に「異邦人伝道を最優先したわけではなく」(42)、実際には各地に散っていたユダヤ人が主たる伝道対象だった、と言いきります。

キリスト教徒は「ローマ帝国」によって大々的に組織的迫害を受けたか、というのも微妙です。「ネロを嚆矢として代々のローマ皇帝は一世紀から四世紀まで迫害をつづけ、キリスト教徒は多くの殉教者を出しながらこれにたえ…、遂には勝利した」(69)とわたしたちは単純に思い込んでいます。著者は否定的です。64年におきたローマ大火をめぐるネロ帝の迫害以後、三世紀半ばまでローマ皇帝が命を下した迫害は実は一回もない、とのこと。たしかに迫害はあったが、誰がどのような状況でキリスト教徒を「迫害」したのかは、一筋縄では語り尽くせない、ということです。歴史的事実に関心がある向きはじっくりとお読みください。著者松本宣郎氏は長く東北大学で教えた先生です。

表紙の写真について

五島列島の若松島にあるキリシタン洞窟前に据えられた白い十字架とイエス像。

五島崩れと呼ばれる明治初期の迫害時、隠れキリシタンの3家族12人が舟で島へ渡り、断崖絶壁にできた洞窟へ潜んでいた。しかし数か月後のある朝、洞窟から漏れた炊事の煙が通りかかった漁船に怪しまれ、代官に密告された。デジタル朝日新聞によると、捕らえられたキリシタンの家族は、海に投げ込まれ、浮き上がったら沈められ、浮き上がったら沈め

られる「水責め」、三角の角材を並べた上に正座させられ、太ももの上に重い板石を載せていく「算木責め」の拷問を受けたという。その一部始終を見ていた当時9歳の娘が晩年に話をしたことで、キリシタン洞窟が世に知られるようになった。

1967年、洞窟の入り口に十字架と3メートルのキリスト像が設置された。今もそこへは船でしか近づけない。

五島列島教会群の巡礼は、美しい海と教会、殉教の歴史が重なり合い、印象深い旅となります。機会があれば訪れることをお勧めします。

1月の教会カレンダーへの追加と変更

- 1月 7日 中村克徳神父様歓迎会、ミサ後。
 1月12日 「福音書を学ぶ会」 14時～16時。
 1月13日 中高生のお泊り会を延期して
 1月20日19時～に変更。
 1月20日 「ラウダート・シの読み合わせ会」
 14時30分～16時30分。

研修委員会からのお知らせ

大人の日曜学校を1月28日の主日のミサ後にカール記念館2階和室で開催します。

池田市歳末助け合い募金に協力

池田市歳末助け合い募金に協力晴れわたった12月3日、待降節第一主日のミサのあと、池田駅前で、日曜学校の子供たちが歳末助け合い募金のお願いを通行人に呼びかけました。まずは、社会活動委員会の方が立ち、その後日曜学校を終えた小学生がたすきをかけて引き継ぎ、最後は中高生たちが交替しました。かわいい子供たちの呼びかけに、通る人々の心もなごんだことでしょう。子供たちにとっては、社会に直接貢献できるよい機会となりました。



尚、募金額は26,670円でした。このお金は池田社会福祉協議会を通して福祉施設などに寄付されます。ご理解とご協力ありがとうございました。

青少年育成委員会・社会活動委員会

宝塚黙想の家から黙想会のお知らせ

■日帰り黙想会

1月18日(木) 10:00～15:30

1月19日(金) 10:00～15:30

指導: 山内十束神父



■週末黙想会

1月27日(土) 17:00～1月28日(日) 15:30

指導: 山内十束神父

■韓国語による聖書の勉強

1月31日(水) 10:00～15:00

指導: アンドリュー神父

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。 ☎0797(84)3111

編集後記

一年が終わり、新しい一年が始まる。広報部では、この数年、よんどころない事情により一人、また一人と有能な広報委員が去っていった。教会の桜も一本また一本と消えていく。ミサで近頃見かけなくなった方々もいる。遠いホームに入られたと人づてに聞く。天国へ旅立たれた友もいる。神父様の移動があるとも漏れ聞く。年末はなぜか悲しくなる。会うは別れの始まりという言葉が身に染みる。とはいえ、いくつかの悔いを残しつつも、この一年が無事に終わった。来年は聖パウロの書簡を自分なりに読みこなそう。イエスの生涯をもう一度、自分なりに考えてみよう。広報部にも若木が一本植えられた。神に感謝。

ソフィー